

間の関係性」という最も古くて、しかも新しいOR手法である予測問題であり、いまだ未解決で主要なORの課題となる。そのような観点から、この報告の中で紹介されている設計法は、生産計画モデルの解から納

期を見直し、その納期をもとにスケジュールリングを行う①、②、③をセットにした在庫問題を取り上げられた興味深い報告であったと思う。

見学会参加の記



柳井 浩 (慶應義塾大学名誉教授)

9月16日は朝から快晴、暑さもさほどではなく、絶好の見学日和。明石城が目前に迫るグリーンヒルホテルを出発した大型バスは、明石海峡大橋の雄大かつ優美な姿を右に見つつ、舞子の浜を東に進む。

参加者は、案内の労をとられた地元神戸の先生方を含めて15名。人数は多くはないが、それだけに和気あいあい。

最初の訪問先はUCC上島珈琲・六甲アイランド工場。我々にとっては、身近な嗜好品であるコーヒーが、生豆から、異物(コイン、鍵、手鉤、そして葉莢!)の除去に始まり、焙煎の工程をへてブレンド、グラインドされ、さまざまな形に包装出荷される様子を、コーヒーの高い香りとともに目の当たりにすることができた。

官能検査にもとづく“商品の設計”、“安定した品質”そして消費者のニーズに合わせた“夢のある包装”——これらが、このような食品産業のかなめであろう。派手さはないが、装置や作業の改善をはじめとする地道な努力が、工場の清潔なたたずまいからもうかがえた。

活発な質疑応答ののち、コーヒーのおみやげを頂戴して工場をでると、そろそろ食事時である。神戸とい

えば、灘の生一本。左党には抗しがたい魅力である。酒蔵つきのレストラン神戸酒心館で各種の銘酒を少しずつ味わいながら、優雅な和食に清談のひとつきを過ごした。

昼食後は須磨寺に赴いた。歴史の古い名刹とはいえ、今日では、文字通りの観光寺、バスの駐車場から崖を墓地にエレベーターで導くなど、見学者の動線には心が配られていたが、寺社建築としてみれば、かなり雑な“作り”のものも見られた。平 敦盛と熊谷直実の騎馬像を囲む“石”もプラスチック製で、叩くとポコン・ポコンと音がした。しかし、これも一興。

新幹線で遠くへ帰る参加者もいることで、バスは新神戸駅により、さらに、阪神地区の参加者のために三宮駅に向かう。3月の中央大学での研究発表会での再会を期して別れを惜しんだ。

交通渋滞を計算に入れて立てなければならない都市部での見学会の企画、企業見学の交渉などに当たられた、オーガナイザーの能勢先生、直接案内の労をもとられた塩出、米山の両先生を始め、多くの大会実行委員会の方々のお陰で、楽しく、有意義な一日をおくることができた。ありがとうございました。